

アニマルウェルフェアを題材とした教育デザイン研究

—知識、体験、発信のプロセスと学びの継承—

葭内 ありさ*

Educational Design Study on Animal Welfare

Processes of Knowledge Acquisition, Experience, Dissemination and Succession of Learning

Arisa YOSHIUCHI

Animal welfare is an issue that high school students should be exposed to at an early age, as it relates to ethical consumption and is directly linked to the climate crisis and food security. However, the concept of animal welfare is not widely known in Japan. The aim of this study was to investigate how high school students can learn through an educational design and to propose an educational method on animal welfare. As a method, an educational design on animal welfare was conducted in the second-year home economics classes at A High School for 120 students in 2017. According to a preliminary awareness survey, the students' knowledge and interest were limited. As a result, after the class, the high school students were observed conducting outreach activities at their school's cultural festival. When the processes of 'experience', 'knowledge' and 'dissemination' were incorporated into the learning, it became clear that the familiar 'experience' as an introduction led to a positive understanding of animal welfare among the students, while 'dissemination' led to the succession of learning to lower grade students.

Keywords: Animal Welfare, Ethical Consumption, High School Home Economics, Educational Design Study, SDGs

1 問題の所在と先行研究

本研究は、A 高等学校の家庭科で、アニマルウェルフェア (Animal Welfare)¹を題材としたエシカル消費の教育デザイン研究を試みたものである。

ここで題材とするアニマルウェルフェアは、日本語では「動物福祉」と訳され、アニマルライツ＝動物の権利に配慮することを指すもので、日本でもようやく議論されるようになった概念である。

この概念について、NPO「アニマル・ライツセンター」代表の岡田千尋は、「アニマルウェルフェアとは、動物が意識や感覚がある存在であることを理解し、たとえ短い一生であっても、動物の生態・欲求を妨げることがない環境で適正に扱うこと」であるという。これまで、動物福祉に関する議論において以下の「5つの自由」²が論じられてきた。1. 飢餓と渇きからの自由、2. 苦痛、傷害又は疾病からの自由、3. 恐怖及び苦悩からの自由、4. 物理的不快からの自由、5. 正常な行動ができる自由、である。これらは、動物種や利用目的を問わず、国際的な共通認識となっており (佐藤, 2011)、広く人の管理下にある動物福祉を図るための指針となっている (上野・武田, 2015)。これに加えて、岡田らのアニマルライツセンターは、「6. 喜びなどポジティブな体験ができ

キーワード：アニマルウェルフェア、エシカル消費、高等学校家庭科、教育デザイン研究、SDGs

* お茶の水女子大学附属高等学校

る自由」も提言している（岡田, 2021）。

このようなアニマルウェルフェアの考え方が先行したのは欧州であり、現在では、特に畜産業の動物の扱いについて、科学的にも食の安全と関係するものとみなされるようになってきている。工業的畜産は、畜産や餌となる穀物栽培のための森林伐採、牛のゲップに含まれるメタンガスなど畜産動物の温暖化ガス排出に直接的にも関係するため、気候危機の原因ともなっている³。EU では工業的畜産システムは改善や禁止の方向にあり（松木, 2011）、アニマルウェルフェアに関する法規制の整備が進んでいる（佐藤, 2019）。

こうして、アニマルウェルフェアは、国際的には90年代後半から検討が続けられ、2000年代以降特に畜産動物の扱いについて法整備が進み、その結果、日本の大手食品会社も国際的なアニマルウェルフェア格付けの対象となってきた。このような国際的な動向と、SDGsの登場が後押しした日本におけるエシカル消費の概念自体の広がりが、アニマルウェルフェアが特に近年日本でも特に議題とされ始めたことにつながったのではないかと考えられる。もともと、エシカル消費は、アパレル分野が先行したこともあり、アニマルウェルフェアに関係する毛皮や動物性の素材の利用や廃止について、倫理的な消費が先行して見られてきた。食用畜産動物の皮や毛皮、植物性の人工皮の利用をエシカル・ファッションで用いる事例など、アニマルウェルフェアの概念が広がりを見せている。

しかしながら、日本においてアニマルウェルフェアの概念はそれほど浸透してはいない。日本と欧州の動物観はその端が異なる⁴が、そもそも日本では、2016年12月に一般市民300名を対象に行ったアンケートでは9割近くがアニマルウェルフェアを聞いたことがなく、意味を知っていると回答したのは1名であった⁵。

このように、日本はアニマルウェルフェアの考えは浸透しておらず、畜産動物の法整備は今後の課題の段階である。教育においては、古くから学校で、動物飼育体験が行われてきたが、その目的は児童生徒が動物の特徴や生命に触れることにとどまる。アニマルウェルフェアを明示した教育現場における研究は、本稿で対象としたA高等学校の取組のほか、小学校の総合的な学習の時間に関連した科目において、社会の教員による牛乳廃棄と生命倫理を扱った実践（須本, 浅野, 2022）に限られている。A高等学校家庭科では2011年よりエシカル消費を授業の題材として扱い始めたが、当時は、一般に日本で「エシカル消費」を語る際に、アニマルウェルフェアはあまり強調されていなかった⁶。

このような現状において、学校教育においてもまた、動物愛護の観点に限らない、アニマルウェルフェアの理解に繋がる授業のデザインが求められていると言える。

2 本研究の目的

そこで、本研究では、2017年度にA高等学校で実施した、欧州発のアニマルウェルフェアを基準とした日本の現状を踏まえたアニマルウェルフェアを授業の題材とした、教育デザインの検討を行う。本研究の目的は、この試みがどのように高校生の学びとして、内化や外化と関係するのかを明らかにし、アニマルウェルフェアを用いた教育実践の手法を提案することである。

内化と外化は、一般に教育用語として用いられている言葉でもあり、溝上によれば、それぞれ用い方に厳密な定義があるわけではない（溝上, 2018）。自らが学んだことを、他者に教えるという形で、外にあらわす、すなわち外化する。他方で、外化に対応するのが内化である。つまり、自らが学んだことを自らの内で理解する作業であるといえよう。溝上は、「内化を十分におこなった上での外化が重要である。」という（溝上, 2017）。

Engstromは、学習サイクルのモデルの6つのステップに内化と外化を位置付け、外化を、実践および応用のプロセスであるとし、「具体的行為などの助けを借りて、自分の説明モデルを再構成するときに、外化が生じる。

（中略）応用は、理論を豊かにし、修正し、新しい問題を明らかにし、創造性を高める。」と論じており、理論と実践を結びつけることは、双方を豊かにするという（Engstrom, 1999 : 44-45）。

内化と外化は、アクティブラーニング型授業を考える際に重要な語であり、アニマルウェルフェアといった持続可能性に関する教育においても、知識の内化と外化をどのように組み合わせるかが学びのデザインにおいて

課題になろう。よって、本研究においても、分析の視点として、学びのデザインを検討する際に、生徒の内化と外化に着目することは意義あることと考えられる。

アニマルウェルフェアを授業に取り入れる目的は二つある。第一に、生徒がエシカル消費は人権だけではなく、動物の権利までも考えることに気づき、消費の背景への視点を広げることである。第二は、アニマルウェルフェアはエシカル消費のカテゴリーの中でも日本での認知度が低いものの、上述のように国際的には重要な概念であるため、アニマルウェルフェア自体への意識を育成することである。

身近な食に関係する題材は、生徒の背景への視点を養いやすく、日常生活に関わると考え、本研究では食と関連させた授業のデザインを試みた。

3 方法

方法として、アニマルウェルフェアを題材とした授業デザインを行い、生徒の学びを検討した。A 高等学校家庭科では、アニマルウェルフェアの内容に関する授業は2012年度から行なっていたが、エシカル消費においてアニマルウェルフェアの概念が登場してきたのを受け、2016年度からはエシカル消費のカテゴリーの一つとして、区分けして授業で扱い始めた。本稿では、2017年度の高校2年生の授業を取り上げる。対象は2年家庭総合3クラス120名(2単位)である。

A 高等学校のエシカル消費の授業は、知る、体験する、発信する、のプロセスを授業のデザインで試みていることが特徴である(葭内, 2023)。それらのプロセスのうち、ここでは最初に調理による体験を導入とし、その後、アニマルウェルフェアの詳細を知るという流れを採用した⁷。これは、生徒が題材に触れる際に、楽しみやすい体験を導入とすることにより、生徒の題材への興味・関心を惹きつけることが可能なのではないか、と考えたためである。そのため、家庭総合の授業において、事前意識調査とアニマルウェルフェアに配慮した調理実習、「アニマルウェルフェア」の解説、映画「いのちの食べ方」視聴、講義の順で行った。関連した指導計画は図1である。

| 指導計画 (アニマルウェルフェア関連) | |
|--|--------|
| 意識調査, アニマルウェルフェアのプリン調理実習 | 2 時間 |
| 「エシカル消費」概要授業 | 2 時間 |
| 映画「いのちの食べ方」視聴 | 1 時間 |
| アニマルウェルフェアの講義 (文化祭 アニマルウェルフェアジェラート販売・展示) (エシカル消費に関する中学校訪問授業) | 0.4 時間 |

図1. 2017年度2年「家庭総合」指導計画 (アニマルウェルフェア関連)

4 導入授業

4.1 意識調査

本研究で対象とした2017年度のA高等学校のアニマルウェルフェアについての導入授業冒頭で、畜産動物のアニマルウェルフェアに関する意識調査を行った。アンケート回答数は114名である。調査結果では、自分が卵を購入する際に、放し飼い⁸の卵かどうかを気にしている生徒は1.7%(2人)で、気にしていない生徒が98.2%(112

人)であった。「放し飼いではない卵と放し飼いの卵があった場合に、どちらを購入しますか」の問いでは、「価格が高くて放し飼いの卵を買う」と回答した生徒は10% (11人)、「価格が同じなら放し飼いの卵を買う」、が49%(55人)、「放し飼いの卵の方が安ければ買う」、が41% (46人)であり、価格によって購入を決めると回答した生徒が90%であった。

畜産動物がどのように飼育されているかについて、「よく知っていて関心もある」と回答した生徒は0.9%(1名)、「よく知らないが関心がある」は39.4% (45名)、「よく知っているが関心はない」は7% (8名)、「よく知らず、関心はない」が52.6% (60名)であった。よく知っていると回答した生徒は8%、よく知らないと回答した生徒が92%であり、ほとんどの生徒に知識がなかった。また、関心がないと回答した生徒が6割となった。産動物の飼育に問題があるのを知っていた、と回答した生徒は27% (31名)、知らないと回答した生徒は72.8% (83名)であり、何らかの知識がある生徒がいる一方で、7割を超える生徒は問題があることを知らなかった。

畜産動物について知っていることがあれば書いてください、という自由記述で、アニマルウェルフェアに関する回答では、牛の過密飼育や、BSE を不正確に記憶していると思われる記述が見られたが、記述は6人とごく限られており、ほとんどの生徒は無回答であった。

授業当初の意識調査からは、生徒が畜産動物に関連するアニマルウェルフェアに関して知識が乏しく、過半数を超える生徒は関心もないことが明らかになった。

4.2 「ミニマム・エッセンシャル・サステイナブルクッキング」によるエシカルなプリン調理実習

導入授業に、体験する授業として、アニマルウェルフェアに配慮したプリンの調理実習を行った。

配当時間は2時間の連続授業であり、2年家庭総合の年間計画の3回目または4回目であり、第1回の調理実習としてのガイダンスの意味も持つ授業である。期間は、5月下旬～6月上旬であり、1クラス40名を20名に分級して120名を6回に分けて実施した。この際、A高等学校で開発し、家庭科の調理実習の方針として取り入れている、「ミニマム・エッセンシャル・サステイナブル・クッキング」⁹の手法で行った。調理材料としてアニマルウェルフェアに配慮した牛乳と卵を用いた。なお、プリンの材料は、牛乳、卵、砂糖、水、及びプリン型に塗るバター、のみであり、家庭にある鍋で、加熱時間3分と蒸らし時間のみという、ごく短時間で省エネルギーでもある方法で作るプリンである。限られた材料と工程を用いることにより、生徒が、アニマルウェルフェア及びエコ調理といった、エシカルな面に着目しやすいことを意図した。

4.3 アニマルウェルフェアに配慮した牛乳と卵

実習では、アニマルウェルフェアに配慮した牛乳として、熊本県の有機ジャージー放牧牛乳を用いた。プリン実習自体は毎年、調理実習導入として実施してきたが、2016年度は熊本地震があり、被災地応援の意味も含め、熊本産のジャージー牛乳と、熊本県益城町の平飼い卵を使用したため、2017年度も熊本県産の牛乳を用いた¹⁰。

ジャージー牛は、英国ジャージー島原種の小柄な茶色の牛であり、牛1頭あたりの搾乳量も少ない。しかしジャージー牛乳はホルスタイン種よりも乳脂肪分やタンパク質が多く、コクがあり、プリン等菓子の材料に向いている。アニマルウェルフェアの観点からは、ホルスタイン乳牛は、大量に搾乳するために品種改良を行った品種のため、牛に過度な負担があり、病気になりやすいなど問題がある。また、アニマルウェルフェアとして、牛舎に繋いだままの繋ぎ飼いや、餌となる穀物飼料に関する牛の病気、飼料を育てるための森林伐採など環境破壊が問題となっている。授業では牛本来の生態である、牧草地に放牧され、草を食んだ有機認証のジャージー牛乳を用いた。

卵は、近隣県である、神奈川県の上養鶏場の平飼い有精卵¹¹を用いた。この養鶏所では、日の光や風が通る開放鶏舎での平飼い養鶏を行っており、同じ平飼いの中でも、エビアリー（多段式平飼い）ではなく、鶏が雛の段階から自由に動き回れる方法で、特にアニマルウェルフェアに配慮した養鶏を行なっている。餌には抗生物質は用いず、餌に国産米も用いることで、国内水田の活用を行なっている。販売している卵の紙パッケージには、

「Animal Welfare」の文字が記載してあるため、授業では卵と牛乳の解説を掲載したプリントに加え、パッケージごと卵を配布し、生徒がパッケージを観察した。

4.4 実習の流れ

調理実習では、まず教員が演示したのちに、4名ずつの班に分かれて生徒が調理した。演示の際には、アニマルウェルフェアに配慮した材料の説明を行った。牛乳に関しては、材料用と別途牛乳を用意し、牛乳単独での生徒の試飲も行ない、生徒からは「美味しい」、「牛乳は好きじゃないけどこれは飲める」と言った肯定的な感想が聞かれた。教員が以前宿泊し研修した、ジャージー牛の放牧牧場¹²での牛本来の生活を大切にしたい牧場の様子も伝えた。完成したプリンを試食の際、いずれの班の生徒たちからも「美味しい」等の声が聞かれた。

生徒には、調理実習後、翌週提出の振り返りのプリントを課題とした。振り返りプリントの「研究・応用」欄は、生徒が調べ学習などを自発的に行う課題であり、この実習については、生徒が再び自宅でプリンを作り、写真等を添付する事例が多く見られ、授業の狙い通り、生徒が自宅でも気軽に調理をすることが出来る教材だったと言える。生徒の感想からは、肯定的な体験としてプリン実習を捉えていることがわかった。

5 「エシカル消費」概要授業

5.1 エシカル消費の概要とアニマルウェルフェアの説明

プリン作成の授業の後、知るプロセスとして、「エシカル消費」の概要説明の授業を行った。

生徒は、1年次、2年次初めまでの家庭科の授業で特に人権面の課題についての学習を終えているが、エシカル消費全体の概要については初めて学ぶ授業である。2017年度に扱ったエシカル消費のカテゴリーは、「リサイクル&アップサイクル」、「フェアトレード」、「天然素材」、「有機栽培」、「伝統技術」、「無駄の削減」、「ソーシャルプログラム」、「天然素材」、「有機栽培」、そして「アニマルウェルフェア」である。エシカル消費が多角的なものであることを理解させることを目的とした授業であり、配当時間は連続した2時間と限られているため、エシカル消費の概要全体を伝えることに重きを置いた。そのため、各カテゴリー一つ一つの説明の時間は限られ、「アニマルウェルフェア」についてはごく短い説明となった。

説明では、アニマルウェルフェアの簡単な紹介ののち、特にエシカル・ファッションにおけるアニマルウェルフェアの題材を扱った。エシカル・ファッションにおいては、近年毛皮の利用が残酷だとして行われなくなってきており、従来「フェイクファー」と呼ばれていた人工毛皮の名称も、現在はポジティブな印象を与える「エコファー」や「ヴィーガンファー」という名称が使われるようになってきた（授業時）ことを伝えた¹³。また、海外では、既に生徒にも馴染みのあるファッションブランドH&Mや（JAVA, 2013）、ZARAを有するスペインのアパレル大手Inditexが、動物愛護団体の訴えを受けてアンゴラ素材の服の販売を廃止しており（AFP, 2015）、アンゴラうさぎの事例、すなわちアンゴラうさぎは、生きたままむしる毛の採取方法が残酷だと動物愛護団体に批判されていることを伝えた。2017年の段階では、毛皮をファッションに取り入れるが、毛皮を使用するまでのその生育方法において、人道的に生育した毛皮を用いたエシカル・ファッションブランドも存在した。授業では、全く動物性のものを扱わないことをコンセプトとするブランドもある中で、倫理的に飼育した動物を扱うことをコンセプトとしたエシカル・ファッションブランドもあることを紹介し¹⁴、何がエシカルと言えるかはその視点から成されるのではないことを伝えた。エシカル消費を白黒で考えるのではなく、何がより良い選択なのか、また、先に調理実習で扱った食に関するアニマルウェルフェアだけではなく、アパレル分野のアニマルウェルフェアを扱うことで、生徒が広く生活の中で考える題材提示を図った。

5.2 映画「いのちの食べ方」視聴

このように、エシカルなプリン作成や「エシカル消費」におけるアニマルウェルフェアの概念説明の後、アニマルウェルフェア、特に工場畜産に関する題材を含む映画の視聴を行った。

アニマルウェルフェアには、アニマルライツに関わる課題が多方面に渡っている。その中でも、私たちの日常の食に関わる、畜産動物のアニマルウェルフェアは、動物の権利だけではなく、気候危機、食の安全にも直接的に関わり、高校生が早い段階で出会い理解を深めるべき事柄の一つである。そこで、授業では、生徒が包括的にアニマルウェルフェアを理解できる映画として、食の大規模・工業的生産の現場のドキュメンタリーである、映画「いのちの食べ方」¹⁵を取り上げた。「いのちの食べ方」は、2005年にドイツ・オーストリア合作のニコラウス・ゲイハルター監督制作のドキュメンタリー映画である。映画内では、工業的畜産業、漁業、農業、岩塩採掘など、私たちの食に関わる大量生産現場の映像が、淡々と流れる。授業では40分程度に教員が各場面の解説を加えながら早送りして視聴した。また、各場面の内容を集約した解説プリントを上映前に配布した¹⁶。現在、EUを中心として、アニマルウェルフェアの考え方は広く市場に取り入れられてきており、欧州では特に畜産動物において、この映画で描かれた様子より現状は大きく改善しているが、日本ででは先述のようにアニマルウェルフェアの浸透が欧米に比較し遅れており、制度や法律の整備はほぼ行われていないため、この映画は、工業的食糧生産とともに、現在の日本の状況と合わせて生徒に理解させるのに適している。

映画視聴では、生徒は、初めて見る大量生産の工業的な食料生産の映像も多く、映画に集中し、大きく反応したり感想を口にしながら視聴する様子が観察された。例えば、人工授精で生まれたひよこが、ベルトコンベアーに乗せられて、次々と高速で箱に投げ込まれる場面や、次のシーンで箱から工場のスタッフが雄雌の判別をして雄を捨てていく場面では、3クラス全てで多くの生徒から驚きの声が上がった。このように視聴した後に、教員が映画を振り返りながら邦題「いのちの食べ方」の意味について触れ、その後生徒は各個人で感想を記入した。

5.3 教員による「アニマルウェルフェア」の講義

生徒が映画で学んだ後に、映画視聴後の翌週以降の授業で、教員によるアニマルウェルフェアの授業を行った。配当時間は20分である。授業では、日本と欧州の動物観の違いにも触れた上で、アニマルウェルフェアの5つの自由といった概要を最初に説明した。アニマルウェルフェアが先行している欧州では、特に畜産業の動物の扱いについて、科学的にも食の安全と関係するものとして、法整備が進められている現状を、特に映画で見た鶏、豚、乳牛の工業的生産について振り返り、さらに新たな写真スライドも提示しながら、解説を行った。

日本でまだ未解決の、アニマルウェルフェアに関する畜産動物の課題は多いが、既にEUでは広く解決のための法整備や仕組みが出来ているものとして、採卵鶏のケージ飼育、肉用のブロイラーの鶏の飼育方法、乳牛の繋ぎ飼いや、母豚の妊娠ストールの使用、などに関するものが挙げられる。

鶏の飼育については、映画の中では、雄のひよこの選別や、檻を立体的に積み重ねた飼育舎であるバタリーケージの状況が紹介された。授業では、さらに写真を用いて、バタリーケージの状況や、他の飼育方法を解説した¹⁷。さらに、畜産動物の餌に抗生物質を添加することに関する薬剤耐性菌（AMR）の課題を解説し、食肉ブロイラー鶏については、映画で登場した過密飼に加えて、屠殺のための移動中の課題を説明した。

牛については、映画では、肉牛の精子工場、牛舎飼育の牛や、ホルスタイン種の乳牛の大型工場における搾乳の様子が映し出され、屠殺と解体のシーンを視聴した。授業では、乳牛のつなぎ飼いにについて、写真を見ながら解説した。

豚については、映画の中で雄の子豚の去勢、人工授精、屠殺・解体の他、母豚の妊娠ストールを振り返った。日本で9割を超える（日本養豚協会, 2019）母豚の妊娠ストールの使用は、国際的には解決済みの国も多い議題であること、さらに、ロンドン・リオ・北京オリンピックでのアニマルウェルフェアやフェアトレードの食品や花束の調達レベルについて解説し、2020年に予定されている（授業時）東京オリンピックの調達について伝えた¹⁸。

以上のように、アニマルウェルフェアを題材とした授業では、実際にアニマルウェルフェアに配慮した材料を用いたプリン実習での体験、教員による授業でのエシカル消費の概説の一部としてアニマルウェルフェアの概説、映画の視聴、アニマルウェルフェアの詳細補足の授業という形で、実施した。

6 授業後の生徒の発信活動

以上の授業は、生徒にはどのように伝わったのだろうか。2017年度のA高等学校の生徒の自治会活動である文化祭は、初の試みとして、「エシカルな文化祭」をコンセプトとした文化祭が行われた。時期は、2017年9月16日(土)10:00~16:30、9月17日(日)09:00~15:30である。文化祭全体に関する概要は葎内(2018)を参照されたい。文化祭では、アニマルウェルフェアに関する発信の取り組みが見られた。以下にその概要と、それが下級生にどのように伝わったかを述べる。

6.1 ジェラートの販売と展示

文化祭では、生徒の取り組みとして、模擬店におけるアニマルウェルフェアのジェラート開発販売と、展示によって、来場者や生徒に発信する様子が見られた。

A 高等学校の文化祭では、模擬店で例年大手有名メーカーのアイスクリームを販売していたが、よりエシカルなアイスクリームを販売したいと考えた2年生の担当生徒が検討し、最終的に、高校1年生の学年合宿の滞在先である長野県・諏訪の、「ジェラテリア六花」¹⁹のジェラートを販売することとなった。関連し運営に関わった高校生は、全体で約50名の生徒である。企画立案の中心となったのは2年生の文化祭実行員であり、模擬店係長の2年生徒1名を、ジェラートと連携して開発した別商品販売企画の担当2年生徒1名が綿密に補助した。そのほか2年生文化祭実行委員メンバー10名や、ジェラートに関する展示、販売者として高校3年、2年、1年生の模擬店係の生徒約40名が担当した。

このジェラートは、材料として長野県の地産地消の新鮮な食材が用いられている。八ヶ岳の中央農業実践大学校²⁰で育った放牧乳牛の牛乳が用いられている点で、アニマルウェルフェアに配慮している。模擬店での販売に際し、ミルク、抹茶、ヴァローナチョコレート味のジェラートを販売し、さらに、文化祭限定販売のオリジナルの味のジェラートも開発した。オリジナルの味に用いたのは、文化祭の別企画として開発販売した、「A高のお茶」の有機栽培のハーブほうじ茶である。このハーブほうじ茶はA大学生が産学連携で開発したものであり、担当の大学サークル、作り手である鹿児島の有機茶園と、長野県諏訪のジェラート店、東京のA高等学校、エシカルな包装材を提供した東京の印刷会社との、5者での外部連携を行った企画である。新鮮なミルクを用いた作りたてのジェラートは、当日の朝諏訪より届けられ、大変好評で

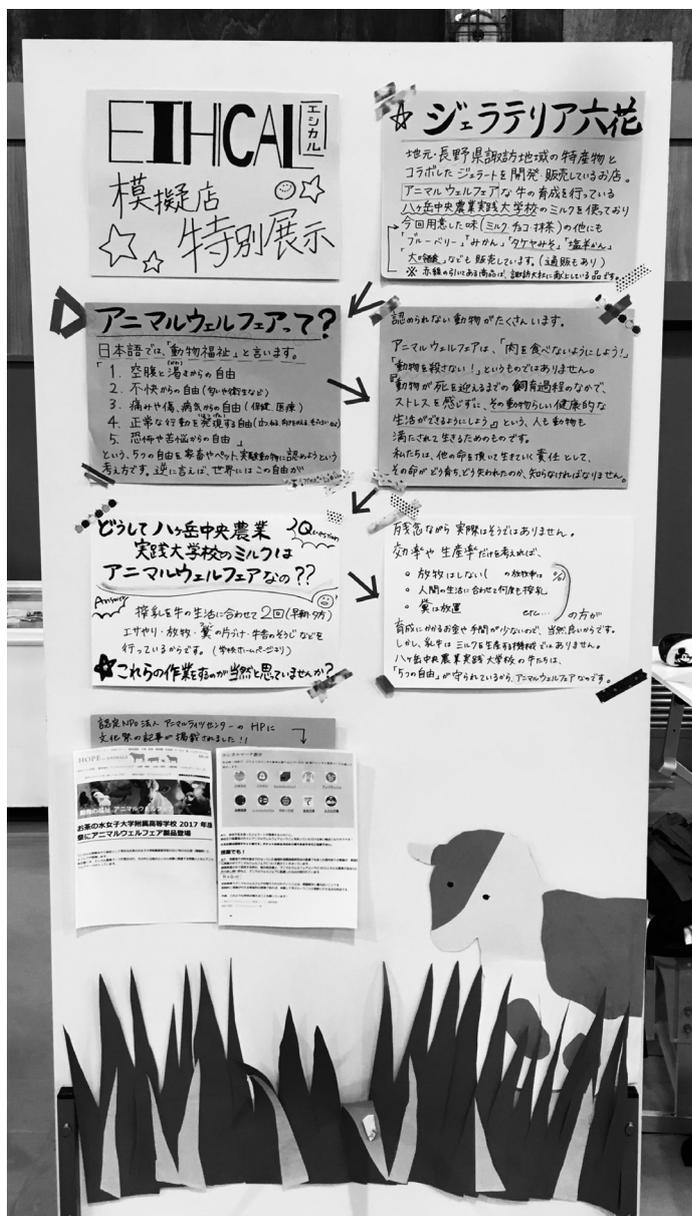


図2. 文化祭の生徒のアニマルウェルフェア展示

あり、校内での事前予約において、前年度比約 1.5 倍の個数が予約された。文化祭当日も、開場後両日 1.5 ～ 2 時間以内に完売し、販売個数は総計 929 個であった。また、ジェラートの販売所である体育館では、アニマルウェルフェアに関するパネル展示が行われた（図 2）。生徒による牛のイラストと共に、日本の乳牛のつなぎ飼いの現状が解説された展示が行われた。解説では、授業で教員が教えたアニマルウェルフェアの 5 つの自由などの内容に加えて、「私たちは、他の命をいただいて生きていく責任として、その命が、育ち、どう失われたのか、知らなければいけません」といった生徒の考えや、生徒が自分たちでさらに調べて紹介する解説が見られた。展示の中には、「どうして八ヶ岳の中央農業実践大学のミルクはアニマルウェルフェアなの??」というタイトルで、ジェラートの原料に使われた牛乳に関する飼育方法を調べ、その内容と関連させてアニマルウェルフェアの解説がなされた。このように、家庭総合での学習は生徒の取り組みへと発展し、文化祭で深まり、商品開発という具体的な事例とともに発信された。一般の外部の来場者と、校内の生徒の両方にアニマルウェルフェアのジェラートを提供し、展示を公開することができた（葎内, 2018）。

6.2 下級生への学びの継承

2018 年度の A 高等学校の 2 年家庭総合においても、継続してアニマルウェルフェアの授業を行い、事前意識調査を行ったところ²¹、アニマルウェルフェアという言葉を知っていたり、聞いたことのある生徒は 50%であった。この数値は、ごく限られた生徒しかアニマルウェルフェアに関する内容を認知していなかった 2017 年度 2 年生の事前意識調査と比較して高い。アニマルウェルフェアを知っている、聞いたことがある理由を記述する設問では、「ネット」及び「TV」、家庭で親から聞いた、と回答した生徒が各 1 名ずつ見られたが、その他の 9 割を超える生徒は、「前年のエシカル文化祭」、「先輩の探究」、「家庭科の授業」を挙げており、家庭科の学びが発展した文化祭を通じて校内の下級生へ学びが継承されたことが明らかとなった。2018 年度の高校 1 年生は、家庭科の授業として中学 1 年生にエシカル消費を伝える訪問授業を行い、その際の生徒考案の発信活動の内容には、アニマルウェルフェアを中学生に伝えるひよこの体験的なワークショップや劇が含まれるなど、アニマルウェルフェアの学びが生徒に印象的であることが伺え、学年を継続した学びが、生徒の内化に繋がると言える（葎内, 2023）。

7 まとめ

授業前の意識調査では、2017 年度の高校 2 年生は、アニマルウェルフェアに関する知識がほとんどなく、関心も強くはなく、背景をよく知らないことで、卵は価格によって商品を選んでいることが明らかになった。しかし、授業のデザインを行うにあたり、体験を導入とすることにより、生徒の題材への興味・関心を惹きつけることが可能なのではないかと考え、アニマルウェルフェアの材料を用いた調理実習という体験を主とした導入授業を実施したところ、生徒が体験を肯定的に捉える様子が伺えた。生徒に馴染みのない題材に対し、ショッキングな映像を用いた、知ることからの導入ではなく、最初に調理実習によるポジティブな体験を導入としたことは、無理なく生徒が題材に出会う機会となったことが伺えた。さらに、映像や講義を通じて知識を得る学習を通じ、一部の生徒は文化祭での外部連携も生かしたアニマルウェルフェアに配慮したジェラートの商品開発や、自分たちで学びを深めた発信活動としての展示につなげることができた。このことから、生徒が一連の授業で内化を深め、それが行動や発信という外化に表れたと言える。

さらに、文化祭での取り組みを通じ、人気であったジェラート販売と展示と共に、下級生にアニマルウェルフェアが伝わり、上級生の発信によって学びの継承がなされていることが明らかになった。文化祭は、ジェラートを食べるという体験と、展示による知るといった学びの機会となった。上級生の、アニマルウェルフェアの授業によって起こった内化が文化祭での発信という外化に表れ、さらにそれが下級生の内化へとつながることができると言える。

本稿では、アニマルウェルフェアを題材とする際に、知る、体験する、発信のプロセスを用いること、特に知

識や関心の乏しい題材について、体験を導入としながら学ぶことが内化を推進する可能性を提示した。アニマルウェルフェアは、畜産動物に限らず、幅広い内容を含む。また、気候危機と畜産動物の関係も多角的に捉える必要がある。生徒自身の思考の深化や視野の広がりに関係する教育デザインや、教育現場における題材の浸透方法を探ることが今後の課題である。

付記

本研究は、2023年博士学位論文 葎内ありさ「高校家庭科におけるエシカル消費に関する教育デザイン研究」の第5章 アニマルウェルフェア pp. 104-116 (2023, お茶の水女子大学院) を再構成したものである。

謝辞

本授業に真摯に取り組んだ生徒の皆様、教育活動にご協力下さった関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

註

- 1 アニマルウェルフェアが関係する具体的な事柄は、畜産動物、実験動物、犬の殺処分など家庭動物、ファッション業界における毛皮や皮の扱い、サーカスや動物園、動物カフェなどにおける展示動物の扱い、野生動物の扱い他、多岐に渡る。
- 2 ジョージ・ハリソンが1964年に著書『アニマル・マシーン』で集約的・工業的畜産を告発すると、欧州では動物福祉を求める世論が形成され、イギリス政府の諮問調査委員会ブランベル委員会を設置した(永松, 2012)。ブランベル委員会は、1965年に動物福祉における「5つの自由」を提言し、英国畜産動物 アニマルウェルフェア専門委員会が洗練させて1992年に提案された5つの自由である(佐藤, 2011)。
- 3 アニマルウェルフェアの観点だけではなく、気候危機に加担しない消費行動としてのヴィーガンや、月曜日は肉を食べないようポール・マッカートニーと娘のステラ・マッカートニーが提唱した「ミート・フリー・マンディ」運動、可能な時は肉を控えるフレキシタリアンなど、肉を食べる量を減らす取り組みが国際的に見られる。
- 4 佐藤は、「我々の行為が、動物の望みに沿った生活に貢献できたかの結果責任こそがアニマルウェルフェア改善発想のポイントとなる。日本人が古来よりたしなみとして大事にしてきた『動物愛護』という動物に対する心理的関係の構築を求めるのではなく、アニマルウェルフェア改善とは動物個体の自由や権利の保障である。(中略) アニマルウェルフェア改善という西欧的発想と日本人のたしなみとの間に齟齬はない。」と述べている(佐藤, 2019: 36)。
- 5 東京都市大学枝廣淳子研究室が一般市民300名を対象にインターネットによる調査を行った(枝廣, 2018)。
- 6 日本では、従来犬の殺処分の問題のように、家庭動物の扱いに関するアニマルウェルフェアの活動が主であった。
- 7 授業としての発信は、2017年度の学びのまとめとして中学校訪問授業を行った(葎内, 2023)。
- 8 飼育方法には、平飼いと放し飼いでは違いがあるが、ここでは知識のない生徒でも質問を理解しやすいよう、「放し飼い」を設問に用いた。
- 9 「ミニマム・エッセンシャル・サステイナブルクッキング」は、A高等学校の前任家庭科教員である、田中京子教諭が、大学と連携して開発した「ミニマム・エッセンシャルクッキング」を土台として、さらに葎内ありさ教諭が環境配慮のエコ調理の視点を取り入れた、A高等学校の調理実習の方針である。
- 10 遠隔地の材料を用いることは、輸送にかかる環境負荷の観点からはエシカルではないが、ここでは東京のA高等学校からは遠隔地となり、当事者意識が強くないと思われる被災地支援の材料を教材とすることを目的とした。
- 11 井上養鶏場 HP: <https://sagamikko.com> (2022年1月8日最終閲覧)
- 12 長野県八ヶ岳の清泉寮・キープ協会が運営するジャージー牧場である。牛本来の生態に合わせた放牧のジャージー牛による牛乳生産宿泊での体験を行なっている。牛の生活のサイクルに合わせた時間の搾乳や、堆肥も有効活用する循環型の飼育を行なっていることを授業で伝えた。公益財団法人キープ協会 HP: <https://www.keep.or.jp> (2022年9月19日最終閲覧)
- 13 動物の毛皮を用いないことを示す「ヴィーガンファー」という呼称は、2022年には、石油由来のものを肯定するとして、「ヴィーガンレザー」の呼称の検討同様、他の呼称が検討されるように変化している。
- 14 動物的な素材を用いない先駆的なエシカル・ファッションブランドに、ステラ マッカートニー (Stella McCartney) があり、徹底的に動物の皮や動物性繊維を排除して服を生産している。一方、2011年にパリ・エシカル・ファッションショーにおいて日本人で初めてグランプリを受賞した志賀亮太による「SHIGA」は、自然死した毛皮を用いた、福島で生産のエシカル・ファッションブランドである (SHIGA はパリに拠点を移し、2024年の時点で、日本では活動していない)。
- 15 日本では2007年に公開されロングランとなり、国際的な映画祭で数々の受賞をしている。日本公式 HP: <http://www.espace-sarou.co.jp/inochi/> (2022年9月19日最終閲覧)
- 16 畜産動物の屠殺や魚工場が魚が機械で捌かれるシーンもあるため、映画を上映する際には、生徒に屠殺シーンが含まれることを伝え、毎回の屠殺シーンの前には予告の声かけを行い、直視出来ない生徒は見なくても良いという配慮を行なった。
- 17 採卵鶏の飼育方法には、大まかに4つに分けられ、積み重ねた檻の中での拘束飼育であるバッテリーケージ、広さがバッテリーケージより確保されるエンリッチドケージ、屋内で自由に鳥が動くことの出来る平飼いと屋外での放牧に分けられる。
- 18 2012年のロンドン、2016年のリオオリンピックでは完全ケージフリー卵が用いられ、その他にもアニマルウェルフェア

に配慮したオーガニック食品やフェアトレード食品が用いられていたことを解説した。授業後の東京オリンピックではエシカルな調達がなされなかったばかりか（アニマルライツセンター, 2021）、東京オリンピックの42会場の半数に当たる20会場では、関係者用弁当13万食が廃棄され、廃棄率25%での食品ロスがあったことが明らかになった（朝日新聞, 2021）。

- 19 ジェラテリア六花：長野県諏訪郡下諏訪町立町628-8は、2021年に閉業している。
- 20 中央農業実践大学校 HP: <https://yatsunou.jp/news.html> (2022年10月2日最終閲覧)
- 21 2018年度は、2年生が映画を視聴する前に、意識調査を行った。対象は2年生3クラスであり、113名の回答があった。実施は2018年5月A組14日(月)B組1日(火)、C組10日(木)の授業冒頭の5分間である。アンケート項目は、畜産動物はどのように飼育されているか知っているか、アニマルウェルフェアを知っているか(A組のみの設問)、卵のケージ飼育を知っているか、卵を買うときに放牧や平飼いかを気にするか、日本で牛は放牧していると思うか、畜産動物は動物福祉的に問題のない方法で育てられた方が良いかとその理由、フォアグラやアンゴラうさぎについての認知度である。

参考文献

- AFP, 2015, 「ザラ親会社、アンゴラ販売を中止 中国の生産法を愛護団体が非難」, 2015年2月10日, <https://www.afpbb.com/articles/-/3039226> (2022年9月19日最終閲覧).
- アニマルライツセンター, 2021, 「東京オリンピック、卵と肉のアニマルウェルフェアは低いままですか?」, <https://www.hopeforanimals.org/animal-welfare/tokyo2021/> (2022年9月19日最終閲覧).
- 朝日新聞, 2021, 「五輪会場、弁当1カ月13万食廃棄 組織委『改善した』」, 朝刊, 2021年8月27日デジタル版, <https://www.asahi.com/articles/ASP8W55CSP8WUTQP00Q.html> 最終閲覧2022年1月8日).
- 枝廣淳子, 2018, 『アニマルウェルフェアとは何か—倫理的消費と食の安全』岩波書店.
- Engstrom, Yrjo, 1999, *Training for Change: New Approach to Instruction and Learning in Working Life*, Intenational Labour Organisation.
- ゲイハルター, ニコラウス 2005, 映画「いのちの食べ方」, <http://www.espace-sarou.co.jp/inochi/> (2022年9月19日最終閲覧).
- JAVA, 2013, 「H&M、アンゴラ製品の生産を永久に停止!」, <https://www.java-animal.org/topics/2013/12/03/1988/> (2022年9月19日最終閲覧).
- 松木洋一, 2011, 「アニマルウェルフェアの現状と課題(2): アニマルウェルフェア畜産に取り組む世界の動向: 健康な家畜の飼育と食品安全」 『日本獣医師会雑誌』64(5): 359-365. https://www.maff.go.jp/j/chikusan/sinko/attach/pdf/animal_welfare_iken-15.pdf (2022年9月19日最終閲覧).
- 溝上慎一, 2017, 「溝上慎一の教育論,(講話)外化としてのアクティブラーニング」, 2017年1月16日掲載, <http://smizok.net/education/> (2023年2月1日最終閲覧).
- 溝上慎一, 2018, 「内化・外化の定義」, 「溝上慎一のホームページ: 溝上慎一の教育論」, [http://smizok.net/education/subpages/aglo_00011\(naika_gaika\).html](http://smizok.net/education/subpages/aglo_00011(naika_gaika).html) (2023年4月8日最終閲覧).
- 永松美希, 2012, 「欧米におけるアニマルウェルフェア—動物福祉畜産の動向—」 『農中総研 調査と情報』30:12-13.
- 日本養豚協会, 2019, 『平成30年度養豚農業実態調査報告書』.
- 岡田千尋, 2021, 「アニマルウェルフェア」2021年10月23日八千代松陰学園講演資料, 認定NPO法人アニマルライツセンター.
- 佐藤衆介, 2011, 「アニマルウェルフェアの現状と課題(1): アニマルウェルフェア: 獣医師の新たな業務」 『日本獣医師会雑誌』64(2): 88-92.
- 佐藤衆介, 2019, 「アニマルウェルフェア向上の畜産的意義と国内外の動き」 『家畜感染症学会誌』8(2): 35-41.
- 須本良夫・浅野光俊, 2022, 「動物の幸せを考える生命倫理の授業の研究(1): 牛乳廃棄の授業から考える経済動物とは」, 『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』(2): 11-20.
- 上野吉一・武田庄平, 2015, 『動物福祉の現在—動物とのより良い関係を築くために』, 農林統計出版.
- 葎内ありさ, 2018, 「エシカルな文化祭—学びの実践の場としてのあり方を考える—」 『お茶の水女子大学附属高等学校研究紀要』63: 73-90.
- 葎内ありさ, 2023, 「高校家庭科におけるエシカル消費に関する教育デザイン研究」, 博士学位論文, お茶の水女子大学.